

淡江社だより

第6号

平成22年11月発行

乾節先生追悼号



1995年

安威

故郷思慕

わが父祖の地
摂津 大野、
いく千歳を清らけし
安威の川水。

春は緑なす竹林
筍子のそぞろ地を割る頃
やすみ田は紫雲英の花に蝶もたはむる、
秋は空澄みて赤松の山に茸香り
酒倉の背戸の木立の
熟れ柿は枝もたわたわ。
夏、雲をうつつして激つ早瀬に鮎は銀鱗を躍
らせ
山藤は白々ときりぎしに匂ひかかりぬ。
冬、淡々と陽の射す中を
粉雪の乱れ舞ふ寒日や、三島台地。
見渡せば
ここに生れて
ここにまじはり
ここに息づき
ここを終の棲栖に
わが祖の人々は
つき つぎ
生きつづけたり。



いま、われ
丘の路を辿り、辿り、
のほりつめていただきに立てば、
目路遠くしづまります藍野陵
あるは大戦冠古廟のあたり
鍬かたげゆく人も見ゆ。

これと呼び
かれを指しつつ
いとなみのあと
思ひやるだに杳かなり。

ああ、声もなくここに眠れる墳墓のひとびと、
その山を
その川を
いま 佇ちてここに眺めやるその裔の孫な
るわれら。

空高く吹く風のかうかうと鳴り、
川水は 今日も 淙々と瀬の音響かす、
ああ、そは、そのかみの日のごと
あはれ、安威
ふるさとよ、安威。

註 「安威」は旧大阪府三島郡安威村
現大阪府茨木市安威

『いくその春秋』乾節子詩文集より

乾 節子先生を お偲び申し上げて

一色 義子

乾節子先生と申しあげると、あの端正に和服をお召しになって、丁寧なお言葉で、でも、きっちりのご指導をされた恵泉女学園での月日をお懐かしく申し上げます。恵泉女学園の創立者河井道先生が、学園がはじまって間もなく、ご母堂さまにお願いして、お若かった節子先生にお習字を第一回生からお教えくださいました。私はちょうど一九四〇年、当時の日本流に「皇紀二六〇〇年」という年に恵泉女学園一年に入学して、週に一回のお習字の時間、乾節子先生にお習いしました。私は成城学園の小学校でしたので、ほとんどお習字をしなかったも同然でしたので、筆の持ち方から、文字通り、お優しい先生に手を取って、点から、線から、お教え頂きました。たしかその頃、新しく出版された長江先生のお手本をはじめ使わせていただいたのではないのでしょうか。大変特別なすばらしい先生と

して長江先生をととても尊敬していらしやるお話でしたことがこどものような私たちにも特別なこと、その御手本をいただいで幸いなこと、と伝わりました。

そして、二年になった時、書き初めを他校と一緒に展覧会に出すようにと宿題をいただいで、地方で能筆家と言われた祖父の娘であった母が、あんまり力をいれるので、ようやく仕上げた楷書が、思いがけず一等賞を頂きました。

恵泉女学園の表札も、学校内での展示などのお字はすべて節子先生のお筆の跡で、あの端正な自然なすばらしい御筆跡が、恵泉の象徴となりました。今でも学園の入り口の大きな掲示板にその週の聖書の言葉は二見先生が節子先生以来の伝統を受け継いで守ってくださり、恵泉を訪ねる者に節子先生以来の平安の懐かしさと勇気を告げられます。

戦後、河井先生も列席されて、原町田教会で洗礼をお受けになりました。また、戦後になって誰も顧みなく成った戦争で傷をうけられた傷痍軍人の厚生に指導をされて、その方々に学園からクリスマス祝会にうかがったり、御招きしたりしたのも乾先生の

御優しいご配慮からでした。その頃には、恵泉女学園の専任になられて、国語も御教えになり、担任もされ、ご定年におなりになるまで、恵泉は大変お世話になりました。

河井道学園長が癌で万策尽き、唯一の延命の道は輸血ときまったとき、河井先生と血液型が同じ節子先生が率先して輸血をして下さったことは、河井先生も苦しい息の下から大層感謝されるのでした。そして、河井先生を天に送ったその夏、御殿場の恵泉の山荘で生徒たちの指導を終えてから、二、三日、私たちの山の家に泊まられて、ご一緒に、思い出を懐かしく、母ゆりとしみじみ話をされておられました。（思えば節子先生は一九〇四年のお生まれでその年、母ゆりは津田英学塾に入学、ちょうど米國帰りの河井道先生と出会い、生涯の師弟となったのでした。）なにか不思議なしみじみとしたご滞在の日々で、心に残るいとおいしい思い出となりました。その時も、私はいつか仮名をお習いしたい、と申し上げると、ちよっとお手本を書いてくださったりいろいろ教えても下さいました。でもその後、あまりにも慌ただしい日々を追われて、折を失いました。あの夏は再び帰らず、次

の夏はもう母ゆりは天国の河井先生のおそばでした。

節子先生が「白秋先生」とおっしゃる時の本当に特別な尊敬のこもった口調もお懐かしい以上に、すばらしいご生涯のご師弟でいらつした、と、「いくその春秋」にも「はるな春秋」にも鮮やかな自然と詩情ゆたかな情熱を感じ、あの端正に拝する御たたずまいの中に吾人が決して踏み入れない感動の世界が籠められていることを教えていただく思いで感激するのは、私ばかりではないと存じ上げます。ほんとうにすばらしい先生でした。

京都にお移りになってから、お訪ねしましたら、京都駅の近くのホテルまでお越し下さつて、久々にゆっくりいろいろの御話を承りました。あの時は、ご洋装でした。

節子先生の大切なご令弟の乾長江先生の令夫人民子先生が、恵泉女学園ご卒業後、東京女子大ご卒業の優秀な恵泉の代表的な卒業生で、私共が三年生の時にご着任、早速、クラス担任をして頂き、人生のあるべき道をしっかりと示してください、大変お世話さまになりました。今も私共の学年は民子先生中心に集まってまいりました。(本

年、初めて新宿のクラス会にご出席ご無理でしたが)本当に生涯の恩師です。民子先生から時に、淡江社の展覧会のお知らせを頂きお伺いするようになりました。

乾節子先生の恵泉への影響は絶大で、言葉に尽くせません。心からの感謝とともに、学園の歩みとともに長く御教えをとどめたいと存じます。主イエス・キリストにより、神のみもとにある乾節子先生の上に、さらに淡江社の上に御祝福と平安があることを信じ、思い出の一端を感謝とともに記させていただきます。

恵泉女学園前理事長
淡江社会員



恵泉女学園 書道の授業 一九七〇年頃

乾 節先生の歩まれた道

本籍…大阪府茨木市 ^{いばらきし} ^{あい} 安威

1904年(明治37)11月1日 父・乾角太郎(号 淡江)、母・文(号 玉江)の長女として、台湾・台北病院に於いて生まれる。

1907年(明治40) (節3歳、弟・丈夫1歳)の初秋に台湾から引き上げ上京する。東京、青山に居住し、青山小学校を卒業、東洋英和女学院に入学。家庭の事情により東京家政学院に転校し、第1期生として卒業する。幼少より父母に書と漢学を学ぶ。

1927年(昭和2)より北原白秋に師事し、短歌と詩の指導を受け「多磨の会」の会員となる。白秋逝去後、白秋の高弟、藪田義男主宰の「沙羅の会」の会員となる。主宰逝去後「しろたえ」の正会員となり、この会の発行する『しろたえ』に詩や随筆を投稿する。

1933年(昭和8)より河井道の招きをうけて、恵泉女学園普通部習字科の非常勤講師となる。

1838年(昭和13)春より、1945年(昭和20)終戦まで、陸軍病院職能教育指導教官として、入院中の傷病兵のために書の指導に当たる。この頃、家は四谷若葉町にあり。

1945年(昭和20)5月25日の東京大空襲により被災。相模原に疎開後に、新宿区中落合の弟・丈夫宅に同居。同年9月より1971年(昭和46)まで、東泉女学園教諭として、国語、習字を教える。この間、東京家政学園同窓会会長としてよくその任に当たる。

1946年(昭和22)11月24日、原町田教会において花岡政吉牧師より受洗する。

1955年12月11日、目白教会に転会。京都転居後は老齢のため、時折、世光教会(旧日基)の礼拝に出席。

1971年(昭和46)『いくその春秋』を上梓。

1972年(昭和47)新宿区中落合より、京都市伏見区大亀谷等泉寺に居を移し、独居となる。関西在住の同窓生と親しく交わり、書の個人指導を少数の人々に行う。なお、1951年(昭和26)頃より京都在住の折まで、淡江社翰墨展に書作品を10数回発表する。

1995年(平成7)春、(91歳)群馬県榛名山麓の新生会・榛名春光園に入居。京都時代より、高橋三郎(無教会の指導者で夫人は節の恵泉時代の生徒)より送られる月刊誌『十字架の言』を聖書と共によく読み、祈りの生涯を続ける。

2006年(平成18)8月、大腿骨骨折のため入院手術。退院後新生会・誠の園に移る。

2007年(平成19)7月『はるな春秋』を上梓。

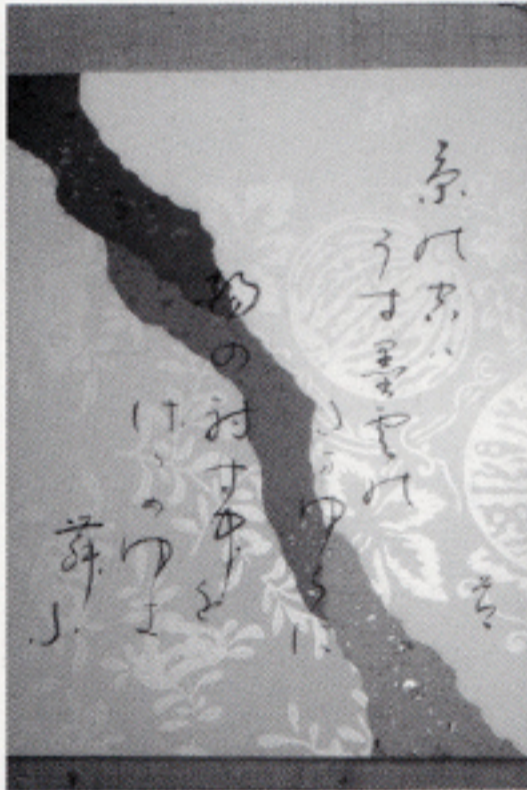
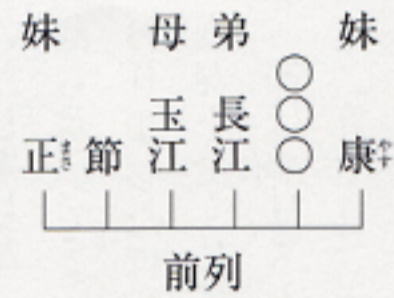
2010年(平成22)1月30日午前10時37分、職員に見守られて眠るように召された。105歳3ヶ月。

(『はるな春秋—乾節子詩集—』乾たみ編集 所収の乾節経歴に一部加筆)

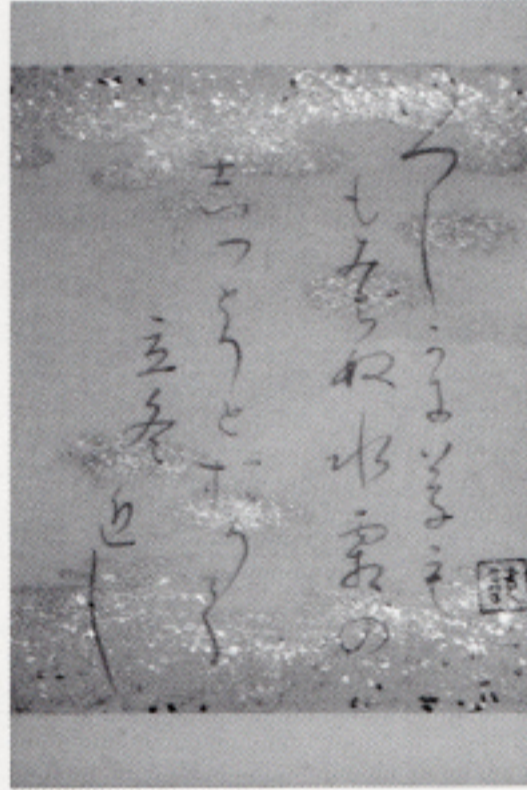


昭和16年11月5日 於銀座三越七階

白衣の勇士と塾生との交歓による
慶応義塾書道会展覧会記念撮影



自詠作品



理事長就任にあたって

塚本尋と申します。このたび、総会での
ご推挙をいただき、大役を仰せつかりまし
た。前理事長の大岡瑛川様には、長期にわ
たりご貢献いただきましたことに心より感
謝申し上げます。今後とも相談役理事とし
てご指導下さいますようお願い申し上げま
す。会員の皆様方のお力をいただいで伝統
を継承し発展させるべく努力する所存でご
ざいますので、何卒よろしくお願い申し上
げます。

◆略歴

一九五一年生まれ、乾長江長女。
一九七四年、東京学芸大学卒。
東洋英和女学院中高部国語科講師を務め
た後、一九七五年より一九七九年まで中国
の北京と瀋陽の大学に留学。
一九八二年、東京都立大学大学院修了。

◆現職

- ・杏林大学教授・外国語学部教務部長
- ・中国語会議通訳者
- ・(社)日本中国友好協会参与

乾節を偲びて

乾 たみ

昭和八年の春です。乾節先生という若い先生が、創立三年目の恵泉女学園に赴任いたしました。習字の教師としてです。その時私は三年生で、週一時間の授業を受ける事になりました。ところが小学校以来中二まで習って来たお習字の先生とはまるでちがった教え方をなさるのです。私はとてもとまどいました。でもこちらは生徒です。黙って教えられるままに二年間がすぎました。しかし以後、私の筆は抽出しの奥にしまわれたまま目の見ることはありませんでした。そんな私が後年、乾家の人となったのですから不思議です。私は昭和二十三年の春、乾丈夫と結婚し、落合に居を定めました。その年の十二月末に、乾の姉妹が越して来て、一緒に暮らす事になりました。

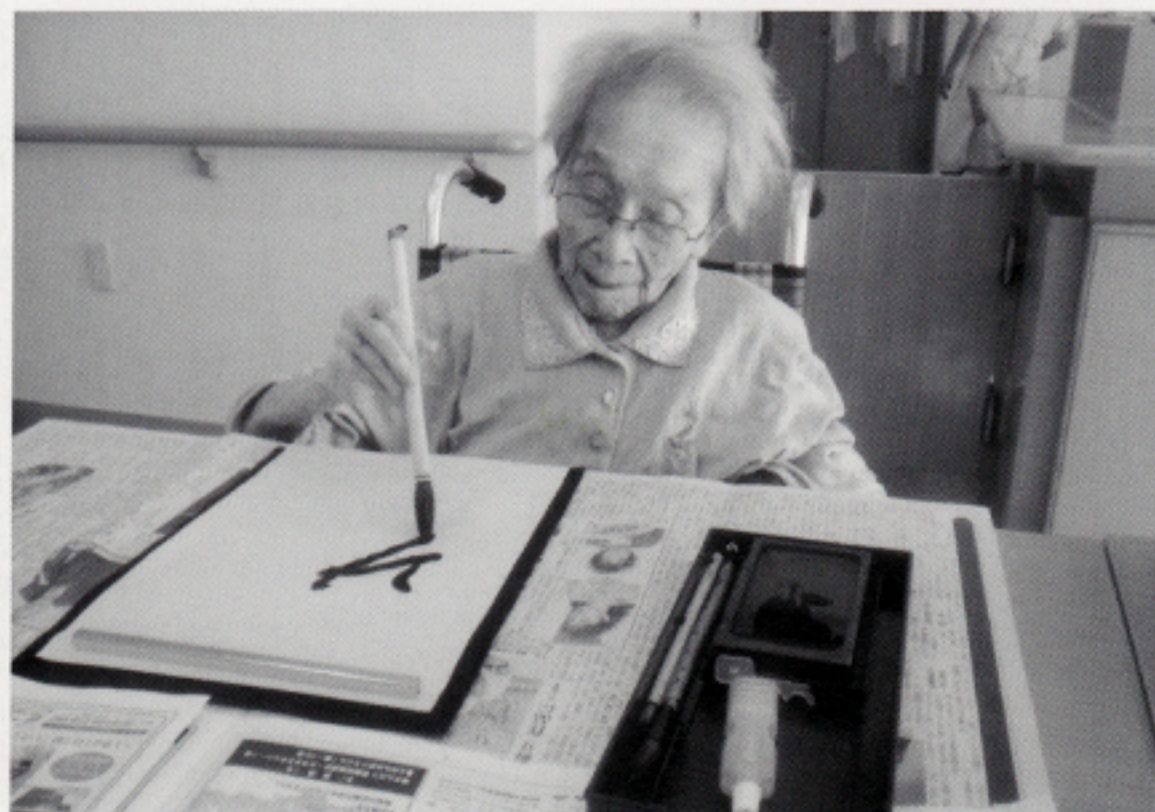
昭和二十年五月の東京大空襲で四谷と世田谷の松原にあった二軒の家を同じ日に焼かれてしまった乾の家族は、相模原の農家の一室に仮住いをしていましたからです。

そして、節（以下、節と記す）は落合から、定年となるまで毎日恵泉に通っておりました。私の長男長女が生れて成人になるまでの二十年ほどにあたります。子供たちが幼いときのかわいがり様は甘い甘い伯母ちゃんバカ？成長すればその時に応じてよい家庭教育の援助者でした。私はありがたく感謝しています。

六十七歳になり、京都に移り、独り自由に生活しておりました時は、関西在住の卒業生に親しくしていただき、お世話になりました。電話をかける事が好きな人で、それが時間をかまわずの長電話ですから、ご迷惑をおかけした方も少なくないと思います。

九十一歳となり、群馬県榛名山南麓の地にある社会福祉法人新生会の春光園に入居いたしました。後に新生会の誠の園に移り、落ち着いてよいケアを受けながら過ごしておりますけれども、今年一月三十日あさ、長寿を全うして静かに永眠いたしました。

節はキリスト教信者でした。二月二日、安中教会の牧師、五味一先生の司式により告別式と葬儀がとり行われました。寒さ厳しい時にかかわらず、淡江社



2010年1月3日 誠の園にてお書きぞめ

の方も多くお見えくださりお世話下さいましたことをありがたく感謝いたしております。

節は生涯多くの師友に恵まれ、その名の如く節度を心得て生きつづけた人でした。私は思います。

ところで、節の履歴は、『はるな春秋』（乾たみ編）にゆずる事として、ここではあ



2009年10月

まり知られていないことを少し書いてみましょう。

節は小さい時から詩を書く事の好きな女の子でした由、母親のゆるしを得て、自分の詩がある会が募集している詩の欄に投稿した事がありましたとか。しかし、父親はこの会に係る事を好まず、後に北原白秋に指導を受けられる様に計ったときいています。以来、節は生涯、詩作やエッセイを綴る事をおこたりませんでした。

節の交友は様々な方面の方でした。或る日、私が春光園の室に訪ねた時のことです。私の前に一冊の本が出されました。見ると漫画本です。「ゲゲゲの鬼太郎」です。聞けば、著者水木しげる本人から贈呈として贈られたのだそうです。

実は、節は、昭和二十年終戦に至るまで長江と共に、傷病兵が入院し治療を受けている病院―陸軍病院と日本赤十字病院―に職能指導教官として書を教えに出かけておりました。白衣の勇士と世の人に呼ばれまされけれど、心身共に傷ついた若い青年たちです。これから先の人生をどう生きればよいかとなやみ苦しんでいる傷病兵の姿をまのあたりにしてこの若い若い兵士たちを上げまし、心をこめて奉仕しつづけたのでした。節と傷病兵水木しげるとがどこで出会っていたのか私はくわしくは知りませんが、苦しみに勝ち、立派に世に出た水木を知る事ができた節のよろこびは一入でありました。

今、テレビで放映されている「ゲゲゲの女房」や、それに関連してインタビューを受けている水木しげるの映像を見せてあげたかったです。

節は多くの教え子や師友に恵まれましたし、普通に市井の人となつていくかつての傷病兵との交わりもありました。また、世の偉い先生方に教えを乞いに出かけられる人でもありました。

最後に、節の短歌二首を記してペンをおきます。

根も幹も まだきまらねば 雨よ風よ
辛くな吹きそ これの稚木に

(「いくその春秋」 八〇頁)

あた、かき師にしたがひて
哲学の径歩みたしとねぎあたりしに

悼 南原繁先生

(元東京大学総長南原繁先生を悼み白扇に
揮毫したものが私の手許にあります。)

平成二十二年八月

榛名にて

重い夜明けに

杉並区和泉町 教師四十一歳

乾 節子

そのころ、私達は空襲のたびに焼けなければ、あるきまりの悪いような、何かの仲間入りのできないような、そんな心もちまです持っていたものだった。

五月二十五日夜の東京大空襲は、十九年十一月からの警戒警報に始まったB29の偵察飛行以来幾度かの大きい空襲を経験していたからこそ耐えられたのだと、私は今にしてもしみじみ思うのである。

夜八時頃、警戒警報発令に追い打ちをかけて空襲警報になる。と、間もなく、永福町駅あたりに、油脂焼夷弾落下という警防団員等の声がある。これが落ちたらもう万事休す。その火をめがけて次々と投下するからである。四囲の家々はすでに焼け落ち、ただ一軒、残った我が家に、私どもは、ホースで二階の屋根ごと、防火用水の雨を降らせた。延焼では絶対焼くまい——、これは隣組防火訓練での合言葉にしていたも

のである。

火炎の赤さと煙の交錯する冲天を眺めていた私は、赤い提灯のように点々としたつなかりをみて、何だろうと弟にきくや、いきなり「姉さん！ 機銃掃射だ！ 軒下にはいれ！」とどなられた。瞬間、ダダダッという連続音は腰も抜けそうな響きだった。

「直撃だッ！」という弟の声に空を見ると、西の方、まっしぐらに進攻してくる一機が四十五度の角度に、まさに、赤い玉を落とした。平生演習時には、こちらへ向かって四十五度の角度に落ちれば真上、直撃だとくりかえし話していたのに、私は見上げつつ、これがほんとうにそうなのかしらと思つたものだった。だが、見ているうちに、その一つの赤い玉は四つに、八つに、十六に、花開くように炸裂しながら落下してきた。危ないつと殆ど無意識に縁さきの大きい石のかげに膝をついて身を屈めた、と同じ時、ザザーッという炸裂音とともに、家屋めがけて直撃、パツと火の海になった。全弾命中である。深いくれないの色の、何千という提灯行列のなかにいるかのような明るさで、天井といわず襖といわず壁といわ

ず、すがりつくようにくっついた油脂の火が、ポツポツと燃える。火叩きでたたくと消える。こうして二階の火はしばし忘れていた私達が、天井の一端の焦げてきたのに気がついて「姉さん、これはいけない、出よう」という弟のことばの、その間にもラジオのアナウンスは狂気のように、部署を離れるな、離れるのは非国民だとわめく。今日の日になお、このアナウンサーの声音は私の耳に残っている。

一度は玄関に出たが、二階の階段から火焰の帯が、背の高さほどに流れてくるのを見ては、曲馬の馬じゃあるまいし、この火のなかぐれるものかと廊下をとって返したが、いまいた茶の間はもう煙が充ちて入れず、台所も同じ、ただ、湯殿一つが何ともなく私たちは、その出入口のくぐりを押して外に出た。隣家はすでに焼け落ちて、焼夷弾筒が田圃の刈株のように、チロチロと燃えながら立ちならぶなかをよけよけ、生垣をのりこえて、駅からの広い道に出て、風上になる大宮公園の方へ途を取った。両側の家々はすでに一人の人影もなく、気配もない。人は何と素速く逃げるものか。ふつと、そんな思いが胸をよぎって、空を見

ると焼夷弾の掩蓋えんがいの大きい鉄の平板が、円盤のように舞い下りてきた。同行していた中島飛行機勤務の若い方が、私をぐっとひっぱって、道端の家の門柱のかげに避けさせて下さった。と、つい鼻さきの道路にその重い板は鈍い、平たい金属音を立てて落下した。この板で、どのくらい多くの人がびとが、頭部や肩などを剥ぎとられたりして死傷したことか……。

五月二十六日、大宮公園の森に重い夜が明けた。それは、まことに無気味な、厭な夜明けだった。あてもなく歩き出したが、永福町の街は道がない。電線が蜘蛛の巣のように、瓦礫の山とともに、それは余燼ではなくて、まだ燃えさかっている。陸軍病院で、職能教育の練習生達が、市街戦の恐ろしさを語って、「市街地は焼夷弾が一発落ちたらすぐ逃げないと、先生、道がなくありますよ」と案じてくれたが、私にはあのアナウンサーの声がどのくらい沢山の人の、逃れる方途を失わせたかという気がしてならないのである。

しこのみ楯と、親を妻を子をおいて、戦線に赴いた前途ある家の柱の男子、学業なかばで応召した春秋に富む若き学生、生徒、

これら有為の壮青少年達は、単なる首相陸相の名に生涯を賭けて働いたのであるうか。後方にありながら戦場同様、砲煙弾雨のなか、爆撃にさらされた私ども婦女子、私は敵機を見あげながら、これは人間の悪業の作り出したことなのだ、自然ではない、してはならない戦争をしているのだと、何とも遣る方のない思いに、幾度、駆られたことだろうか。

軍の機密を洩らしたということ、国防婦人会の会員達があらぬ疑いをうけた時も、私は機密はあくまでも軍の機密である、それは軍人しか知らないものを、もし洩らす者あれば、それは軍人自身であるのにと心傷んだ。誇らしげに、星の徽章もこれみよとばかり、軍都をつないで走る電車内に、長刀、長靴の将校達の声高の談笑内容は、幾度、私の眉をしかめさせたことか。これで私達の耳はふさいでいよというのか。白衣の兵隊達を見る私の目は、いよいよ悲しく辛くなる一方、これら将校連中に対しては、胸いっぱい怒りを何ともしようがなかったのである。

人びとは、私ども全員が火傷一つ受けぬ無事を喜んでくださった。が、それこそ、

文字通りの丸焼け、裸一つ、汚れた手に心尽しのおむすびを頂いた時は、これは天下晴れての乞食になりおおせたと、ほろ苦くかみしめたものだった。

(京都市伏見区深草大亀谷敦賀町 等泉寺内)



出典

東京大空襲・戦災誌(全五卷)

編集「東京大空襲・戦災誌」編集委員会

刊行 財団法人東京空襲を記録する会

(理事長 有馬頼義)

発行 一九七三・三・一〇

第二卷 都民の空襲体験記録集の中に掲載

されたものです。

書との出会い (第五回)

大岡 瑛川

再入門

失業保険給付を受けながら、年金生活に入っていた昭和五十九年 六月頃の或る日 乾長江先生宅を訪問し、再入門のお許しを得て 十月から教室へ通うことになった。

淡江社ではその頃、金曜・土曜がお稽古日で、私は土曜組の池田（現二見）先生について 基本筆法から勉強を始めた。学校を卒業して四十年、自己流の悪い癖がついているので、筆法通りには筆が素直に動かなくて慌てたものである。

次の年に 長江先生傘寿記念 第15回翰墨展が予定されていて雑用をお手伝いしていたら十二月から会計係を命ぜられ、土屋さんから引継ぎを受け、全般の動きに関心を払うようになった。

訓練校と翰墨展

新宿の職業安定所にも時々出頭していると、中野職業訓練校の表具科生徒募集の貼

り紙が目に入った。これは面白そうだと早速手続きし、翌年一月の試験を経て四月から六ヶ月間通学することになった。

四月初の土曜日に、訓練校から淡江社へ廻ると、たみ夫人と長江先生が入院中とのこと。先生は転倒して骨折されたという緊急事態。直ぐ頭に浮んだのは、展覧会準備のこと。これは大変だと、前後も判らぬま、いろいろなことに首を突込んでお手伝いしたのが その後会の運営に深く関わる基になったと思われる。

翰墨展は期日を変更して十月に新宿の朝日生命ギャラリーで盛大に行われた。幸い先生も杖を突きながらも会場内を歩ける迄に回復されホッとした。私も半折に草書四文字の額を出品することを許された。終了日の祝賀パーティーでは、最も苦手とする司会まで仰せ付かって、冷や汗をかきながらも何とか務めを果たした。今思えば、先輩方も大勢出席されて、この頃が最も華やかな時期ではなかったかと思う。

表装修業

訓練校の方も九月に卒業したが、掛軸を作るには、未だ知識不足ということで、有志のグループで講師の関係する企業内訓練

教室に通うことになった。月に二回 木曜日 朝九時から夕方四時まで約四年間で佛表具まで一通りは習って自主解散したが、プロの技能の域には到底至らないと思い知らされた。それでも自分の作品や、親戚・知人に頼まれて十数点の掛軸・和額を作った時期もあり、多少は役立ったかと思っている。

翌昭和六十一年四月からは一年間 東京農大成人学校に通った。週四日で、月・木・土（午後）は授業がないので 他のお稽古に差し支えないと見て、思い切ってやることにしたが、この一年は忙しかった。まだ若かったから出来たことだと思う。こゝでは卒業前に「散歩会」を結成、私も加入してその後約二十年 年五回のハイキングを続けた。良い友達も出来て楽しんだが、今は年一回 新宿御苑で数名集まる程度になってしまった。

十八人展

平成二年 長江先生が指名された門下生を世に出す為と仰しゃって「小品十八人展」を十一月に 有楽町朝日ギャラリーで開催した。私はおこがましくもこれに加えられる。「瑛川」の雅号も許されて出品した。この

小品展はその後「有志展」と称して、翰墨展の合間に七回目まで 新宿高野ギヤラリで続けられた。

シベリア墓参

同じ年の七月 私は第一回シベリア墓参に行つて来た。ゴルバチョフのペレストロイカ政策により、旅行者がシベリアの農村にも入れることになったからである。同じ収容所にいた仲間を中心に二十一名で、私達が埋葬したと思はれる墓地に、白木の墓標を立て、お参りして来た。

この旅行の纏め役だった成富君が詠んだ歌が朝日歌壇に入選したので、後日私はこの歌を半折1/4に書いて軸装して翰墨展に出品した。長江先生にもご指導頂いたものである。

白樺の白木に書ける鎮魂の
文字にじませて手向酒垂る

この軸は、一緒に現地に行きながら、亡き夫の埋まっている墓地の一握りの砂しか持って帰れなかった 竹内候補生の未亡人に差し上げた。

米寿記念展

平成五年十一月には 乾長江米寿記念―第19回淡江社翰墨展を六本木・麻布美術工

芸館で初めて開催した。

翌六年一月には「乾長江書作展」が淡江先生の出身地である山梨県立美術館で開かれ 地元の人々に山梨ゆかりの書家の存在をアピールした。この会には金丸さん、そのお弟子さん方のご協力が大きく 東京から大挙して見学に行った私達もお世話になって 忘れられない思い出である。

長江先生逝去

この頃 長江先生は 私を理事長にし、ご自分は会長となり、今まで集められた蔵書や主だった作品を淡江社に寄贈されるりスト作りを進められていた。私はその任に非ずとお断りしたかったが、最近の先生の体調の推移を考えると 取敢えずお引受けするしかないかと腹を括った。この覚え書の調印が終わった翌日 平成六年七月十八日 長江先生は急性心不全でご自宅で亡くなられた。

目白の武蔵野教会での葬儀も終わり 主なき落合教室は ポツカリと大きな穴が開いた感じがしたが 残された者達で先生の志を継いで行こうという心構えで 今迄通りお稽古は続けられた。平成七年十一月には 乾長江追悼―第20回淡江社翰墨展を麻

布美術工芸館で開くことが出来た。

淡江社だより

平成九年五月に「淡江社だより」が創刊された。長江先生が提案されていたのに 実現が遅れていた やつと追悼特集のような形で日の目を見たのである。これ以来ポツポツであるが続いているのは、先生の貴重な遺稿を中心に、原稿の取り纏めに当初から関わって来られた金丸・松原諸氏のご盡力によるものと感謝している。

遺墨展

平成十八年三月 没後十二年にして 生誕百年記念 乾長江遺墨展 が東京銀座画廊で開催された。乾家の皆様、門下生一同、先生にゆかりの人々の広いご協力により先生の作品百点以上を大きな会場一杯に展開することが出来て 沢山の方に見て頂いて 長江先生と共に会場に居るような懐かしさを覚えたものでした。打上げを兼ねて たみ夫人の米寿をお祝いしたのも楽しい集いでした。

終わりに

行事を追っての記述はこの辺で打ち切ります。

長江先生、この一月に一〇五歳の美事な

生涯を閉じられた節子先生は申すまでもなく、こゝ数年淡江社にとってかけがえのない人々が次々に病に倒れ亡くなられている。まことに残念です。私は自分の力不足は承知しながら淡江社書法の灯を消すなの一念で、これまでやって来ましたが、九十歳も過ぎたので、五月の総会で理事長職を塚本尋さんに替って頂きました。長いことご協力下さった皆様に厚く御礼申し上げます。

今顧みますと、私は書道会に居ながら本当に書と向き合ってはいなかったのではないかと忸怩たる思いがある。淡江社に居る限りは勉強を続けたいと思いますのでよろしくご指導をお願い申し上げます。

私の拙い文もこれで一応終わりといたします。

完



書道教室ご案内

無理のない正しい筆使いで字を書いてみませんか。

書についてお気軽にお尋ね下さい。

ベテランの講師が基礎から個人指導をしております。

稽古日 木・土曜日 月三回

(電話でのお問い合わせは稽古日にお願ひ致します。)

淡江社

東京都新宿区中落合二一七—三
電話 〇三—三九五—八一五二
URL <http://www.tankousha.jp>
E-mail tankousha-001@memoad.jp

編集後記

明治、大正、昭和、そして平成の四つの時代を生き抜き、その御一生を教育に捧げられた乾 節先生のご冥福を心より御祈り申し上げます。

長江先生亡き後の淡江社を支え、多大なご尽力を下さいました大岡瑛川氏が、卒寿を期に理事長の任を辞されました。長い間、本当に有難うございました。

塚本 尋新理事長のもと、淡江社の更なる発展を期待したいと存じます。

この度、貴重な写真を提供して下さいました恵泉女学園史料室、新生会誠の園各位、淡江社の大岡・二見両氏に、心より御礼申し上げます。

(H・M記)

発行 淡江社

東京都新宿区中落合二一七—三
電話 〇三—三九五—八一五二
編集委員 大岡瑛川・本 松園・塚本 尋・三宅白玲・二見采瑛・松原白葉
題字 武藤 素英